

國學院大學學術情報リポジトリ

太宰治「ろまん燈籠」論：接続される「暗」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉岡, 真緒, Yoshioka, Mao メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000171

太宰治「ろまん燈籠」論

— 接続される〈暗〉 —

吉岡真緒

一、はじめに／「その二」の機能

太宰治「ろまん燈籠」は「その一」から「その六」の全六章から成り、各章は各回として『婦人画報』昭和十五年十二月号から翌十六年六月号に連載された（昭和十六年二月号は休載）。「その二」以下の物語が正月五日間の入江家の物語であるのに対して、「その一」は、作者に設定された「私」による自著の紹介であり註釈である。同一テキストとして提示されているが、「その一」は序文に相当するといえよう。従って「ろまん

燈籠」の構成上、「その二」以降は作中作であり、そこにも連作すなわち作中作がある。連作の作者は入江家兄妹に設定されているが、「その二」以降も「私」の叙述として提示されており、幾重もの入れ子が仮構される仕掛けを有する構成である。¹「その二」以下の物語を「八年前に亡くなった、あの有名な洋画の大家、入江新之助の遺家族」の、「現在ごとし」から「四年前の入江の家」とする設定および〈四年前の入江家〉と〈現在の入江家〉に対する「私」の思い入れの変化といった註釈は、「その二」以下の物語の筋に直接関わりはない。しかし「私」を作者に設定し、「その二」以下も「私」の「叙述」とし

て提示する形式は、「その二」以下を「その一」を参照しつつ読ませる強力な戦略といえよう。

一つお断りしなければならぬ事がある。それは、私のからの叙述の全部は、現在ことしの、入江の家の姿ではなく、四年前に私がひそかに短篇小説に取り入れたその時の入江の家の雰囲気^①に他ならないといふ一事である。いまの入江家は、少し違つてゐる。結婚した人もある。亡くなられた人さへある。四年以前にくらべて、いささか暗くなつてゐるやうである。さうして私も、いまは入江の家に、昔ほど気楽に遊びに行けなくなつてしまつた。つまり、五人の兄妹も、また私も、みんなが少しづつ大人になつてしまつて、礼儀も正しく、よそよそしく、いはゆる、あの「社会人」といふものになつた様子で、お互ひ、たまに逢つても、ちつとも面白くないのである。はつきり言へば、現在の入江家は、私にとつて、あまり興味がないのである。書くならば、四年前の入江家を書きたいのである。それゆゑ、私の之から叙述するのも、四年前の入江の家の姿である。現在は、少し違つてゐる。

〔その一〕

「一つお断りしなければならぬ事がある」とは、事柄の重要性を掲げる前置きである。それに続くテキストの叙述形式や時空の指定、入江家の変化、「私」の入江家に対する思い入れの変化といった解説は、「四年前の入江家」に価値を与え、肯定的に捉えさせるよう作用するとともに、比較対象である「暗くなつた」(現在の入江家)をせり上げる。(四年前の入江家は(現在の入江家)という(暗)に接続されているのだ。

入江家あるいは入江家に対する「私」の思い入れの変化について「四年前」という時間差を重視する大本泉は、「ろまん燈籠」が執筆された昭和十五年前後が「日中戦争が泥沼化」し、「リベラリストの作家達にとつては、発言・創作の自由が奪われる時代になっていく」時代であり、時局を「振り入れ」た結果としての(現在の入江家)が「語り手を失望させ」たと指摘する。

テキストは同時代あるいは過去からの引用の織物である以上、時代性を無視することはできない。とはいへ、大本の説はこの時代の文学一般に依る指摘であり、太宰文学における語用論の観点から入江家の変化を捉える余地がある。その際重視されるのが、先行テキストとして提示される「愛と美について」である。

八年まへに亡くなつた、あの有名な洋画の大家、入江新之助氏の遺家族は皆すこし變つてゐるやうである。いや、変調子といふのではなく、案外そのやうな暮しかたのほう^が正しいので、かへつて私ども一般の家庭のほうこそ變調子になつてゐるのかも知れないが、とにかく、入江の家の空気は、普通の家のそれとは少し違つてゐるやうである。この家庭の空気から暗示を得て、私は、よほど前に一つの短篇小説を創つてみた事がある。私は不流行の作家なので、創つた作品を、すぐに雑誌に載せてもらふ事も出来ず、その短篇小説も永い間、私の机の引き出しの底にしまはれたままであつたのである。その他にも、私には三つ、四つ、さういふ未発表のままの、謂はば筐底深く秘めたる作品があつたので、をととのし早春、それらを一纏めにして、いきなり単行本として出版したのである。まづしい創作集ではあつたが、私には、いまでも多少の愛着があるのである。〔その一〕

物語の冒頭部である。語り手・聞き手（読者）の双方が既知であることを前提にした表現によつて読者を虚構の世界へ卷

き込む、太宰の真骨頂といえる書き出しから、入江家をモデルにした先行テクストの存在が告知されている。「その一」にはそのテクストの冒頭の文章が文庫本にして四頁余り引用されているのだが、「短篇小説」とあるのみで題名は明かされない。引用された文章から、昭和十四年五月付で竹村書房から刊行された太宰の小説集『愛と美について』に発表、収録された「愛と美について」の冒頭部に違いないのだが、「愛と美について」に登場する家族は無名であり、父の職業は不明で、執筆時期にも矛盾がある。しかしながら「ろまん燈籠」テクストにおいて「愛と美について」は同じ時期の同じ家族をモデルにした先行テクストとして同定、同質化されており、「四年」の時間差がもたらす家族や「私」の変化という設定を捉えるに際しての参照テクストとなつてゐる。その作用からも入江家の変化は捉える必要があるらう。

また、「(四年前の入江家)」の雰囲気であり題名にもなつてゐる「ろまん／ロマン」という語は、同時期の太宰文学に共通する独特な使用がされておき、この関連から時代性を考察したい。その際にも、本テクスト脱稿の約二年前に書かれた「愛と美について」は重視される。以上の点をふまえてテクストを分析し、戦時下のテクストであり芸術作品として豊穡である本

テクストの、同時代的で普遍的なメッセージを読み取るのが本論の目的である。

二、入江家の遊びの両義性

連作は、「みんな、多少づつ文芸の趣味を持つてゐる」入江家兄妹の遊戯である。この遊戯も、「末弟↓長女↓次男↓次女↓長男」の順に書き継がれる順番も「愛と美について」が踏襲されている。「原稿用紙」に書かれたエクリチュールとしての連作は「〜」と「〜」で冒頭と末尾が示され、各担当者の注釈や創作過程、後日談、「私」の註釈などとともに断片的に提示される。

「愛と美について」の連作は、口頭で聴衆の反応を取り込みつつ即興的に紡がれるパフォーマンスである。対して「ろまん燈籠」の連作には、「原稿用紙」に書かれた文字というエクリチュールと、それを家族の前で作者それぞれが「工夫に富んだ朗読法」で音声化するパフォーマンスとの両面があり、いずれの場面にも作者以外の人物の介入がある。登場人物には朗読発表会の場で初めて物語の全体像が認識されるうえ、もともと連作は「簡単にすみさうな物語なら、その場で順々に口で言つて

片付けてしまふ」という口供性の強い遊戯であることが「その一」で解説されている。それゆえ朗読発表会はパフォーマンスとしての連作が完成する場であり、その最後に「一ばん出来のよかつた人」に授与されるはずだった〈勲章〉は、パフォーマンスとしての連作の帰着点といえよう。

皆で一つの物語を創造し「祖父、祖母、母もお手伝いする」創作過程が叙述されるこの遊戯について、先行論では入江家の温かさや明るさが読み取られており、そうした側面は否めない。とはいえ「おそろしく退屈して来ると、長兄の発案ではじめるのである」との一文が示すように、連作開始の条件は「おそろしく退屈」である。「愛と美について」にも「ときどき皆一様におそろしく退屈することがあるので、これには閉口である」、「退屈したときには、皆で、物語の連作をはじめるのが、この家のならはしである」等の言説があり、「おそろしく退屈」は両テクストに共通する連作開始の条件である。とするならば、次に挙げる「愛と美について」の一節は看過できない。

これで物語が、すんだのであるが、すんだ、とたんに、また、かれらは、一層すごく、退屈した。ひとつの、ささやかな興奮のあとに来る、倦怠、荒涼、やりきれない思ひ

である。兄妹五人、一ことでも、ものを言ひ出せば、すぐに殴り合ひでもはじまりさうな、険悪な気まづさに、閉口し切った。
 (「愛と美について」)

「愛と美について」では連作がすんだ「ささやかな興奮」は、連作開始の「退屈」よりも「一層すごい退屈」をもたらず。「一ことでも、ものを言ひ出せば、すぐに殴り合ひでもはじまりさうな、険悪な気まづさ」である暴力的な「退屈」の到来は、しかし母と兄妹の一体感を示す言動によって無効にされ、母の笑いで小説は終わる。一方「ろまん燈籠」の結末に現れるのは、「勲章」が母に与えられた「感動」である。「勲章」はパフォーマンスとしての連作の帰着点であった。従って「愛と美について」を参照テキストとする「その一」の解説を踏まえるならば、母に「勲章」が授けられた「感動」は、右における物語がすんだ「ささやかな興奮」に重なり、そのあとに来る暴力的な退屈の示唆となろう。「その一」の解説によって連作には両義性が付与されるのだ。

入江家のもう一つの遊戯は「勲章」である。「その一」で祖父の「素描」として叙述される「勲章」は「メキシコの銀貨に穴をあけて赤い絹紐を通し」たものにすぎず、「家族に於いて、

その一週間もつとも功労のあつたもの」に祖父から授与され、その際「一週間は、家に在るとき必ず胸に吊り下げてゐなければいけない」という基本ルールに従い、皆に「閉口」されながら家族間を循環する。大本泉は、入江家を「まぎれもなく温かい『家庭』と捉えつつも、「専制的に統制する父の言説」のない入江家は、「(家)の中核の無い家族ゆえに、(家)という共同体が解体する可能性」を内包しており、「勲章」は「隠居した祖父が与えるものだからこそ、家族における『功労』がまさに形骸化・無意味化し、家族における紐帯の一種の弛緩を暗示」するという同時代の家族制度に即した読解をする。井原あや⁴は、「ろまん燈籠」が執筆、発表された昭和十五、六年当時、勲章は国策に貢献する「戦士」に「畏き辺」から授与される「戦時下を表象するもの」だったのに対し、入江家の「勲章」にはそのような意味が持たされていない点に着目し、「今次事変」以前に設定されている(四年前の入江家)を「ほの明るい世界」とするテキストの志向性を見出し、両説とも(四年前の入江家)に温かさや明るさを見出し、「勲章」に同時代的な権力を見ない点で共通していよう。確かに「勲章」は皆に閉口されているが、しかし継続されている。仮に同時代的な権力とは無縁だとしても、そのこと自体は権力の不在を意味しな

い。

「メキシコの銀貨」は「かなりの貿易商」だった祖父の過去と結び付いており、それを〈勲章〉にしたのは祖父である。「ばからしい」と言つて「はじめから、きつぱり拒否してゐる」祖母以外の家族を、閉口させつつも参加させ続ける強制力は祖父の権威といえよう。「固辞して利巧に逃げてゐる」という長女も「私にはとてもその資格がありませんから」と、〈勲章〉に価値を認めることで「固辞」が承認されている以上、〈勲章〉遊びのシステムに組み込まれている。授与条件である「家族に於いて、その一週間もつとも功勞のあつたもの」とは、「祖父の寄席のお伴の功」・「祖父の晩酌のビールを一本多くした」・「祖父の秘密のわづかな借金を、こつそり支払つてあげた功勞」等であり、これらの例示に明らかなように、「功勞」の基準は祖父にあり、授与者としての祖父の立場は固定している。つまり祖父は皆に閉口される〈勲章〉を継続しうる実行力を有した遊びの支配者であり、父を亡くし、長男も就職していないこの家で祖父の立場は確かといえよう。とはいえ、先程挙げた授与理由は祖父に対する家族の敬愛や思いやりの現れともいえる内容であり、〈勲章〉が入江家の温かさや明るさを示す紐帯であることは否定できない。〈勲章〉は連作同様両義性を有してい

ると言えよう。

「その一」で「私」の「愛着」の対象と解説された〈四年前の入江家〉は、明るさや温かさを読み取られる傾向にあり、先述の通りそうした側面は否定できない。が、同時に「その一」で仮構された「愛と美について」との連結によつて、連作には明るさを反転させる暴力性が示唆されるうえに、〈勲章〉には権力構造が見出せる。この両義性は「その一」で提示された〈四年前の入江家〉と「いささか暗くなつた」という〈現在の入江家〉の接続に即応している。

三、ろまん／ロマン

『太宰治事典』（別冊国文学）47、平6・5、學燈社）の「キーワード事典」における「ロマンティシズム」の項には「ロマンズ」・「ロマンチック」・「ロマン」を含めて「ロマンティシズム」が解説されている。厳密には異なる意味内容のこれらの語が太宰文学においては同義的に使用される傾向があるからだ。

昭和九年に太宰治が山岸外史らと創刊した同人雑誌「青い花」は、初期ドイツ・ロマン派ノヴァーリスの作品名に因み太

宰自ら名づけた誌名であり、その創刊号（昭9・12）に太宰は「ロマネスク」を発表している。祖父によって「ロオマンズ」と称される「ろまん燈籠」の連作が魔法使いや魔法の森が描かれるメルヘンであることは、メルヘンを作中作とするノヴァーリスの「青い花」を想起させるうえ、連作の「剽窃」元の一つとされる「グリム童話」の著者グリム兄弟もまたドイツ・ロマン派に数えられる。そうすると「兄妹、五人あつて、みんなロマンズが好きだった」と紹介され、「人間のうちで、一ばんロマンチックなのは老人である」という理由で「おぢいさん」を主人公に据えて物語を紡ぐ無名の兄妹が描かれる「愛と美について」が引用され、その「ロマンズ」嗜好が「入江家の非凡な浪漫の血」という祖父を始祖とする非凡な血筋に読み替えられる「ろまん燈籠」は、題名が示す通りロマンの系譜を強く意識させるテキストといえよう。

「その一」で入江家は「入江新之助氏の遺家族は皆すこし変つてゐる」、「入江の家の空気は、普通の家のそれとは少し違つてゐる」と紹介される。そしてその「空気」は、子どもたち共有の「文芸の趣味」という芸術的気質へ、さらには「非凡な浪漫の血」という血筋に結び付けられている。「変」、「浪漫」、「非凡」、芸術的気質が結びつけられて愛すべき家族の属性とさ

れ、世間一般や「普通」に對置される叙述に見られるのは、「変」や「ロマン」が世俗的な「普通」を批判する芸術的姿勢であるというレトリックである。「ろまん燈籠」と同時期のテキストである「みみづく通信」（「知性」昭16・1）や「春の盜賊」（「文藝日本」昭15・1）、「デカダン抗議」（「文藝世紀」昭14・10）にも同じ使用例⁶が見出せ、「ロマン」はこの時期の太宰文学において世俗に対する批判のスタイルだったと言えよう。

「変わった家庭」であつた（四年前の入江家）に対して、世間一般を表す「大人」「社会人」と評される（現在の入江家）は、同時期の太宰テキスト群の関連からロマンが不在と捉えられる。同じく同時期の太宰テキスト「愛と美について」の末尾である。

兄妹五人、一ことでも、ものを言ひ出せば、すぐに殴り合ひでもはじまりさうな、険悪な気まづさに、閉口し切つた。

母は、ひとり離れて坐つて、兄妹五人の、それぞれの性格のあらはれてゐる語りかたを、始終にこにこ微笑んで、たのしみ、うつとりしてゐたのであるが、このとき、そつ

と立つて障子をあげ、はつと顔色かへて、
 「おや。家の門のところに、フロツク着たへんなおぢいさ
 ん立つてゐます。」

兄妹五人、ぎよつとして立ち上つた。

母は、ひとり笑ひ崩れた。 (「愛と美について」)

兄妹同一の反応と母の笑いが暴力的な「退屈」を無効にしている。兄妹五人が一斉に「ぎよつとして立ち上つた」のは、たつた今語り終えた連作の主人公が浴衣姿だつたにも関わらず母の言う「フロツク着たへんなおぢいさん」に即座に結びついたからである。物語の主人公が現実に現れるという物語的な状況を共同的に立ち上げる反応は、現実にロマンを呼び込もうとするまさしくロマンチックな兄妹の同一性を表す。これが母の笑いを引き出し暴力的な「退屈」を無効にしているのならば、「その一」によって仮構された「愛と美について」との連結は「ろまん燈籠」の〈現在の入江家〉の属性である「大人」「社会人」が示唆するロマンの不在を深刻にする。とはいえ〈現在の入江家〉が具体性を欠く以上、この深刻さは可能性としてしか現れない。同様に、前章で指摘したように「愛と美について」の作用によって「ろまん燈籠」末尾の「感動」が暴力的な「退

屈」の示唆となつたとしても、あくまでも発動間際という未発性としてのみである。しかしこうした可能性や未発性が現れること自体が物語の陰影ではないのか。

四、エクリチュールとしての連作

末弟による連作第一回に示された、王子と魔法使いの娘ラプンツェルの結婚について「身分があまりに違ひすぎ」ることに着目し、そこに「不仕合せのもと」を見出す祖母の見解は以降の物語でラプンツェルの苦悩、産後の衰弱として展開する。

「魔法使いの家に生れた女の子は、男に可愛がられて子供を産むと、死ぬか、でもなければ、世の中で一ばん醜い顔になつてしまふか、どちらかに、きまつてゐる」とラプンツェルの母である魔法使いの老婆が明かすごとく、ラプンツェルの衰弱は魔法使いの家に生まれた娘の宿命であり、生き延びる代償として「世の中で一ばん醜い顔」にならなければならない。魔法使いの老婆の顔が醜いのは、かつてラプンツェルを身籠もつた際にその母に「生かして置いてくれとたのんだ」結果であつた。一方、ラプンツェルは「死なせて下さい」以外に希望の言葉を口にしない。愛が死か醜に結びつく不条理に加え、ラプンツェ

ルは次のような葛藤を抱える。

「あたしは、王子さまを好きなのです。いのちを十でも差し上げたい」とラプンツェルは言う。「いのちを十でも差し上げたい」とは一命を捧げる以上に不可能である。絶望的な欲望とともに口にされる「好き」はそれゆえに狂気に等しい。が、それほど「好き」な相手でありながら自らの「卑しい生れ」を思い出させるのも王子であり、つらくとも離れられない王子との毎日は「地獄」だったとラプンツェルは言う。ラプンツェルの「好き」が宿命的に死に結びつき地獄の葛藤をもたらす以上、生き延びることそれ自体は根本的な解決にはなり得ない。ラプンツェルからの積極的な依頼がない所以である。それにもかかわらず延命の魔法はかけられ、その結果、宿命に違ふ「輝くばかりに美しい」顔とそれまでには無かった品性とを備えてラプンツェルは再生する。そしてこの不思議に際会した魔法使いは「わしの魔法の力より、もつと強い力の方が、じやまをしたのに違ひない。わしは負けた。もう、魔法も、いやになりました。森へ帰つて、あたりまへの、つまらない婆として余生を送らう」という言葉を残して森へ帰り、メルヘン枠の物語は老婆が言葉通りの余生を送ったことが告知されて一旦締めくくられる。

宿命に違ふ再生、魔法使いが魔法をいやになり「あたりまへの、つまらない婆」になる結末、王子とラプンツェルの行く末等々の謎は「王子の愛の力が、老婆の魔法の力に打ち勝つた」という一言に回収され、幻想と不条理と謎に満ちたメルヘンは長兄の結婚観の披瀝を経た後、次に挙げる「よき戒しめ」に収斂される。

パウロの書翰集。テモテ前書の第二章。このラプンツェル物語の結びの言葉として、おあつらひむきであると長兄は、ひそかに首肯き、大いにもつたい振つて書き写した。

——この故に、われは望む。男は怒らず争はず、いづれの処にても潔き手をあげて祈らん事を。また女は、羞恥を知り、慎みて宜しきに合ふ衣もて己を飾り、編みたる頭髮と金と真珠と価たかき衣もては飾らず、善き業もて飾とせん事を。これ神を敬はんと公言する女に適へる事なり。女は凡てのこと従順にして静かに道を学ぶべし。われ、女の、教ふる事と、男の上に権を執る事を許さず、ただ静かにすべし。それアダムは前に造られ、エバは後に造られたり。アダムは惑はされず、女は惑はされて罪に陥りたるなり。されど女もし慎みて信仰と愛と潔きとに居らば、子を

生む事によりて救はるべし。——

まづこれによし、と長兄は、思わず莞爾と笑つた。弟妹
たちへの、よき戒しめにもなるであらう。 (「その六」)

エクリチュールとしての連作の結び、または「弟妹たちへの、よき戒しめ」である「パウロの書翰集」の引用文は、男に比べて女への「戒しめ」の比重が高い。末尾の一節「女もし慎みて信仰と愛と潔きとに居らば、子を生む事によりて救はるべし」は、女にとつては母になることを救済の必須条件となす最重要事項である。「死なせて下さい」と懇願するラプンツェルに魔法使いが「ラプンツェル、お前は、もう赤ちゃんを産んだのだよ。お母ちゃんになつたのだよ」と、母になつたことを理由にその願いを斥けて再生の魔法をかける物語内容に即応する。この戒めは、ラプンツェル再生の註釈としても機能している。幻想と不条理に満ちたメルヘンが右の「戒め」に収斂する構造からも、エクリチュールとしての連作には母なるものの特化、称揚が構造化されている。母なるものの特化、称揚はパフォーマンスとしての連作にも見られ、連作の全体性ともなっている。

五、パフォーマンスとしての連作

朗読発表会において、祖父は読み上げられた連作の内容に対して「王さまと、王妃さまの事には、誰もちつとも触れなかつた」と指摘して自説を展開する。祖父のこの振る舞いは、「愛と美について」で結末のついた物語を承けて「君たちは、一つ、重要な点を、語り落してゐる」と述べ、自説を展開する長兄と同じである。「その一」でこれから提示される兄妹の連作について「このたびの、やや長い物語にも、やはり、祖父、祖母、母のお手伝ひが在るやうである」と解説される通り、祖父は、家族全員が一堂に会して作り上げるパフォーマンスとしての連作の一端を担っている。

祖父の批評は、割合ひ正確なところもあつたやうだが、口調が甚だ、だらしなかつたので、誰にも支持されず黙殺されてしまつた。祖父は急にしよげた。その様子を見かねて母は、祖父に、れいの勲章を、そつと手渡した。去年の大晦日に、母は祖父の秘密のわづかな借金を、こつそり支払つてあげた功勞に依つて、その銀貨の勲章を授与されて

ゐたのである。

「一ばん出来のよかつた人に、おちいさんが勲章を授与なさるさうですよ。」と母は、子供たちに笑ひながら教へた。

母は、祖父にそんな事で元気を恢復させてあげたかつたのである。けれども祖父は、へんに真面目な顔になつてしまつて、

「いや、これは、やつぱり、みよ（母の名）にあげよう。

永久に、あげませう。孫たちを、よろしくたのみますよ。」と言つた。

子供たちは、何だか感動した。実に立派な勲章のやうに思われた。
（「その六」）

「一ばん出来のよかつた」作者に授与されるはずの（勲章）が母・みよに「永久に」授与されたことに子供たちは「何だか感動」し、皆に閉口されていた（勲章）は初めて価値あるものとされる。祖父の「変に真面目な顔」による「孫たちを、よろしくたのみますよ」は、家の未来を託す遺言として厳肅さを帯び、子供たちの「感動」は一体感となり、授与の場は祝祭空間となる。祖父の判断を正当化する子どもたちの「感動」は、祖父の母・みよに対する信頼、あるいは子供たちの祖父、母に対

する敬愛の現れといえ、先行論に指摘されてきたような温かい家庭を見ることができよう。しかしそれだけではない。

それまで（勲章）は過去の功勞に対する褒美として授与されていたが、ここではその交換ルールに逆行して授与がなされている。これは、未来の功勞を先取る永久授与であり、功勞を約束させる負債である。もともと祖父の權威の表象でもある（勲章）がその価値を増したことは負債性の強度となる。負債は称揚される母でありつづけることを掟化、義務化しかねない。祝祭空間の中、みよの心中は空白である。「その二」以下を「私」の叙述とする「その一」の註釈によって、テキストには必然的に「私」の知り得ない入江家が仮構される構造になっている。また「その一」で、入江家をモデルに物語を創る動機として、同じく入江家をモデルにした先行テキストで「祖父ならびに祖母の事は、作品構成の都合上、無礼千万にも割愛」するという「不当なる処置」をってしまったため、今度は「お二人に就いても語っておきたい」と解説されたことで、テキストには「作品構成の都合上」書き得なかつた何かをも仮構される。こうした空白の仮構と「その一」でこの家族を現在の（暗）に接続する解説とによって、この祝祭空間はただ明るいだけの場面として現出されない。まして右の引用末尾に見られるの

は、みよの母という属性を際立たせる「(母の名)」という註や「孫たち」、「子供たち」という語が、「感動」や「立派な勲章」という語に連なり、母・みよを母という枠に組み入れつつ称揚の対象とするレトリックである。エクリチュールとしての連作に見られる母なるものの称揚と同様、すでにみよは称揚される母という枠に組み入れられている。もしも、みよの母としての自然な愛情が掟化、義務化されたならば、違う仕方の未来がみよから奪われ続けるだろう。末尾の一節に見られるレトリックはその可能性の示唆である。

パフォーマンスとしての連作の帰着点である〈勲章〉授与の「感動」は、「愛と美について」における連作がすんだ「ささやかな興奮」に重なり、その後に来る暴力的な「退屈」を示唆することは述べた。それと併せて永久授与の負債性がもたらす自然な愛情の掟化、義務化の可能性はテクストの陰影となる。し母なるものの称揚それ自体は自然な感情に基づいている。しかし本テクスト発表の前年、「人的資源確保」を目指して厚生省が出した「結婚一〇訓」には「産めよ殖やせよ国のため」との項がある。母となることを、報国の証しとしつつ義務化するスローガンに現れるのは、母や国への自然な愛着を利用しつつ義務化し、押しつけるナシヨナリズム⁸の基本構造であり、母・

みよに向けられた母なるものの称揚と義務化の可能性に通底する。そして、同時期の太宰文学において自然な愛情の掟化義務化が孕む危うさは、「どの恋愛でも傷けられると、恋愛の神が侮辱せられて、その報いに犠牲を求めろ」という掟につき動かされて夫の浮気相手と決闘し、相手も自らも死に至らしめながら「名誉ある人妻」を主張した女房の原理主義を前にして、「ただ、見てあるより他はありません」と「きまり悪げに微笑む」しかない無力さが吐露される「女の決闘」(月刊文章) 昭15・1(6)にも明らかである。恋愛それ自体は自然な感情であるが、女房の恋愛は恋愛の神信仰の掟に従うものである。女房の恋愛における善は掟の遵守であり、そのために他者や自らの命を奪うことにはためらいはない。

もちろん母・みよの愛情の掟化、義務化は可能性としてしか現れない。「ろまん燈籠」の結末に現れているのは、祖父を思いやる母とその母を称揚する祖父に敬愛の念を向ける子供たちによる、温かで祝祭的雰囲気⁹に満ちた家族の図像である。しかし、「その一」でこの家族は〈現在〉の「暗」へと接続されていたのではなかったか。「その一」で連結が仮構される「愛と美について」によって示唆される暴力性やロマンの不在の深刻さや、みよの母としての自然な愛情の掟化、義務化という可能

性は（現在の入江家）の（暗）にリアリティを与える。

おわりに

「その一」で仮構される「愛と美について」との連結が、「その一」で提示される（現在の入江家）の（暗）にリアリティを与えることを指摘した。テクストの相互作用によってモンタージュ的に読解されるメッセージは、先程指摘した「ろまん燈籠」「その一」発表の半年前に完結した「女の決闘」に読みとられるメッセージと基本は同じである。モンタージュは、オイレンベルグ作、森鷗外訳「女の決闘」を断片的に全文引用して新たな物語を展開する「女の決闘」の形式であり、太宰文学の前衛性を表す。

一見温かな家庭を現出するテクストは、しかし（現在）の暗さと切り結びつつ、自然で素朴な愛情や愛着が称揚されつつ掬化、義務化される暴力性という、ナシヨナリズムの核心を衝くメッセージを示唆する。それがあくまでも芸術性を備えたフィクションとして提示されるところに、戦時下のテクストである「ろまん燈籠」のポテンシャルはおそらくあるのだろう。

註

①

本テクストの構造について大本泉「太宰治「ろまん燈籠」」（『太宰治研究』9、平13・6）は「物語は、語り手が兄妹五人を書き写していくという方法をとり入れながらも、語り手自身の文学、ひいては人生に対する興味や理想や懊悩等といったものが、その連作に投影されている」ということは言うまでもない。換言すれば、登場人物それぞれが語り手の代弁者でもある」と述べ、語り手を実体的に捉え、語り手の内面について考察する。また水川布美子「太宰治「ろまん燈籠」の一考察」（『神女大國文』12、平13・3）は物語の空間性に着目した次のような見解を示している。「ろまん燈籠」の語りの構造は次のように考えられる。まず、物語世界外に位置する第一の語り手（≡作者）が、第二次の語り手となる（私）として語る物語世界があり、その中に四年前の入江家を語る、第三次の語り手が存在する。その中に、第四次の語り手（≡五人の兄妹）が登場し、物語（メタ物語）を連作する。両説は、「私」の叙述枠に連作を伴作とする入江家物語を展開する構造において、書く／語る「私」を物語の起源と捉えその記述行為に着目するか、物語の層に着目するかによる差異と考える。確かに「私」は物語の作者、語り手に設定されているが、あくまでも設定であり、実体としての作者ではない。「私」を物語の作者、語り手とする設定がもたらす作用について考察するのが本論である。

②

（一）参照

③

山内祥史『太宰治の年譜』（平24・12、大修館書店）によると「愛と美について」脱稿時期は昭和一四年三月上旬から中旬まで、「ろまん燈籠」脱稿時期は昭和一五年一二月五日頃から昭和一六年五月上旬頃まで。つまり「四年前」はフィクションである。

④

井原あや「ろまん」の灯が照らす先」（『太宰治スタディーズ』5、平26・6）

(5) ヴァルター・ベンヤミン著・浅井健二郎訳『ドイツ・ロマン主義における芸術批評の概念』(平13・10、筑摩書房)における「ロマン(Roman [長篇小説])」には次のような註がつけられている。「十七世紀にフランス語 roman (中世にロマンズ語で書かれた騎士物語) がそのままドイツ語化されてきた語で、もとは「知識人の古典ラテン語に対して—民衆の通俗ラテン語ないしロマンズ語で書かれた、もしくは翻訳された物語のことをいった。同じく「ロマンティック」(romantisch [中世騎士物語的、ロマン的、ロマン主義的])には「十七世紀に作られ、十八世紀に至るまではまず第一に、『中世騎士文学の精神に適った』、『上記の意味での) ロマン的な』を意味した。十八世紀において英語 romantic の影響を受けながら、フランス語とドイツ語双方で次第に、『詩的な、夢想的な、情緒に満ちた、絵のような』という意味が加わり、これが第一の意味にとつてかわる」という註が付されている。

(6) 「みみづく通信」には、作家「私」が若者に「失笑」された理由を「老いたロマンチズム」とする使用がある。「春の盜賊」では「ロマンチズム」「ロマンチック」「ロマンス」が「私」という「変質者」に結び付けられ、「いやだ」と否定される。「この世」「小市民生活」と対置される例が見られる。「デカタン抗議」には「高適で無い」「理想」が「ロマンチズム」と結び付けられたうえで、「理想主義者」を自称する作家によって「理想主義者は、悲しい哉、現世に於いてその言動、やや不審、滑稽の感さへ隣人たちに与へてゐる場合が、多いやうである」と「現世」と対置される。これらの「ロマン」の使用例は、「ろまん燈籠」における、世間一般に対して「変つて」いた「四年前の入江家」に愛着を示し、「大人」「社会人」となった「現在の入江家」に「興味がない」とする叙述に現れる「ロマン」と同じである。

(7) 「東京朝日新聞」昭和十四年十月四日付

(8) 内田樹×白井聡「日本戦後史論」(平27・2、徳間書店)において、ナシヨナリズムは以下のように定義されている。

政治哲学の世界では「愛国主義」とか「愛国心」と訳される言葉には二つのものがあると言われてきました。一つは、パトリオティズム (patriotism) であり、もう一つはナシヨナリズム (nationalism) です。両者の違いについては盛んに論じられてきましたが、多くの場合、前者は「自然なもの」、後者は「操作されたもの」と受け止められていきます。言い換えれば、前者は「下から」、「民衆の生活から自然に湧き上がる郷土への愛」がそのまま拡大したものととらえられるのに対し、後者は「上から」、「国家のエリートが作為的につくり出し、民衆に押しつけることで彼らを時の政府に対して従順にさせ、他国民への傲慢な優越感を植え付ける企み」としてとらえられます。ですから、簡単に言えば、パトリオティズムは善きものであるのに対して、ナシヨナリズムは悪しきものだと考えられます。「愛国心は、ならず者の最後の避難場所である」という有名な警句がありますが、これは後者の意味での「愛国」を指したものと考えられます。愛国心をかさに着たならず者が、政府に従順でない人々を非国民・売国奴呼ばわりし、したい放題をするという光景は、洋の東西を問わず、数多く観察されるものです。